

# 越谷リバーウォーク ガイドブック



まちあるき  
から始まる  
まちづくり



【越谷しらこばと基金助成金事業】

## Koshigaya River Walk Guidebook

—企画・編集—  
越谷リバーウォーク ガイドブック 編集委員会

都市生活空間と水辺空間が融合する  
魅力的なまちづくりを目指して

まちの中心部を

幾筋もの川が縦横に走る“水郷こしがや”。  
環境、景観、防災、交通、

エネルギーなどさまざまな観点から  
いまふたたび注目される川の力。

川は、越谷のまちづくりに欠かせない  
私たち共有の財産です。

歩くから見えてくる

歩くから感じる

こしがやりバーウォーク

新しい発見と一緒にしてみませんか。



## ■ 越谷リバーウォークプロジェクトについて

このプロジェクトは、まちづくりに関わる三団体が主体となり、越谷市のもじらこばと基金の支援を受けて実施することになりました。

越谷市住まい・まちづくり協議会は、昭和六十一年から長年にわたりまちづくり活動を続けてきました。当団体発足当初は都市拡張期にありました。しかし、時代や社会情勢の変化に伴い、本市のまちづくりは、定常期における継続可能な施策が必要になつてきています。

行政主導の施策は、財政や人材・制度や組織面から限界がみえました。今、公民共創にて本市のビジョンを考えたいと思い、まずは市民ひとりひとりが本市の魅力を探すことから始める本プロジェクトを企画しました。

「水郷こしがや」といわれる本市が誇れるものの一つに『川』があります。この郷土の魅力を市民自らが探し、共通の価値として共有することが重要であると考え、河川の緑道を散策するためのガイドブックを制作しました。これがきっかけとなって、郷土への関心が高まり、シビックプライドが醸成されることを期待しています。



越谷市庁舎展望室から葛西用水と元荒川を望む



サンアントニオのリバーウォーク(※写真提供:グッドラックとやま)

### ■ なぜリバーウォークか?

米国テキサス州の都市サンアントニオでは、まちの中心部を流れる河川が度々洪水をもたらしていました。この暴れ川を地域住民や企業が協力して全米屈指の観光都市「リバーウォーク・サンアントニオ」として発展させた物語があります。

利水・治水から親水へ、まちの装置として整備したことや、公民協力で実現したことをお手本に、今回のプロジェクトを「越谷リバーウォーク」としました。「リバーウォーク」には、文字通り川辺を歩くという意味と、その遊歩道そのものを指す意味とがあります。

**越谷しらこばと基金助成金事業**  
主 催……NPO法人越谷市住まい・まちづくりセンター

NPO法人越谷市郷土研究会

協 賛……ポラスグループ株式会社中央住宅

後 援……越谷市、越谷市教育委員会、越谷商工会議所、越谷市観光協会  
越谷市市民活動支援センター、学生地域活動団体どんぐりの国  
企画運営……越谷リバーウォークプロジェクト実行委員会



めぐる小さな旅  
身近な水辺と緑道を

## CONTENTS

### 身近な水辺と緑道をめぐる小さな旅

- 07 川が織りなす越谷の風土と歴史、文化
- 09 誌上ミニ講座①「こしがやの川」
- 13 誌上ミニ講座②「こしがやの地形」

### こしがやリバーウォークガイド

- 19 元荒川緑道(上流)
- 21 元荒川緑道(下流)
- 23 新方川緑道
- 25 逆川・葛西親水・四ヶ村用水・東越谷緑道
- 27 八条用水・谷古田河畔・西幹排・東京葛西用水緑道
- 29 須賀用水・根河原・間久里川緑道
- 31 綾瀬川・末田用水・新川緑道
- 33 大相模調節池(レイクタウン)レイクサイドウォーク

### 越谷市のまちづくり 将来の展望を探る

- 36 先進事例研究「グッドラックとやま」
- 41 川と共にあるまちづくり「将来の展望」

## ■ 越谷の歴史は 川と水田の歴史



復元された藤助河岸の小屋

荒川という大河の合流地であり、この立地が舟運交通や水田農業の発展に寄与してきました。一方で、河川の氾濫に度々苦しめられた歴史があります。

これらの大河は江戸幕府の治水政策「利根川の東遷・荒川の西遷」により廃川となりましたが、新たに農業用水等の利水機能を中心改修されました。

自然堤防の後背湿地にあつた多くの池沼は、灌漑用水の整備によって新田開発が急速に進められ、関東有数の穀倉地帯になつたのは水を治めた人々の長い歴史があつたからです。

これらの農業用水は都市化

### ■ 河岸場の繁栄と衰退

物資を運送する船の発着施設が河岸場（かしば）です。

市内的主要な河岸としては、元荒川の瓦曾根河岸、古利根川の増林河岸、綾瀬川のよしずや河岸、半七河岸、藤助河岸などがありました。

このうち瓦曾根は、溜井と元荒川を区切る「松土手」といわれた中土手に設けられた河岸で、元荒川を上る荷船と下流に下る荷船とが荷を積み替える場所として栄え、溜井の堤通りには河岸

問屋が軒を連ねていました。

また、藤助河岸は、旧日光街道と綾瀬川が交差するという地の利を生かして、綾瀬川を代表する河岸場の一つとして繁栄しました。

明治の近代化以降、鉄道の普及などで河岸場がつぎつぎと廃止されるなかで、藤助河岸は繁栄を続けましたが、大正九年、東武鉄道によって廃止され、事実上昭和初期に廃止されました。

現在、藤助河岸は荷の積み降ろし小屋の一部が復元され、唯一当時の面影を伝えるものとして保存されています。

この河岸場のほか、市内には河川に架かる橋梁が少なかつたため主要な道路にかかる河川には多くの渡船場がありましたが、現在でも、葛西用水をはじめ多く残つております。

越谷市の地形(※越谷自然探訪より)



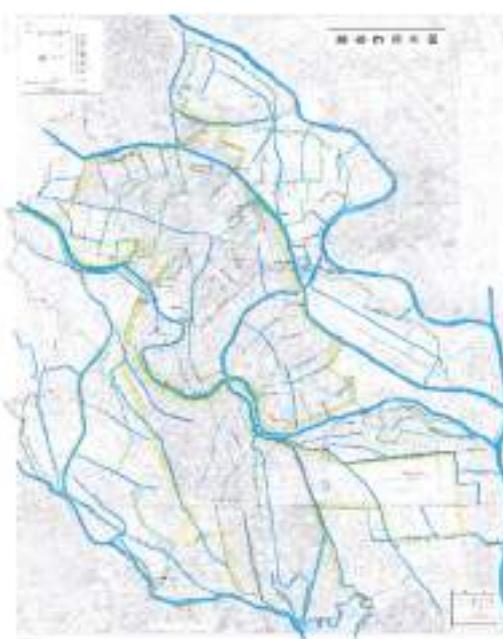
ありました。農業用水、生活用水、そして舟運と、昔から川は、市民生活にとって重要なものでした。

このように、越谷の地形や風土は川の影響を大きく受けてきており、都市化され

た現在において、継続可能なまちづくりを考える上でも、都市河川となつた本市の多くの川や用水をどのように保全し、活用していくかが大きな課題であると考えられます。

(出典 越谷市ホームページ)

## ■ 越谷の歴史は 水郷こしがや



越谷市河川図

された現在でも、葛西用水をはじめ多く残つております。級河川である元荒川、古利根川、新方川、中川、綾瀬川と共に「水郷こしがや」を形成しています。

この他、用悪水路(排水路)は暗渠となつた部分もありますが、痕跡が多くみられ、網目のように水路がつながっています。(越谷市河川図参照)

埼玉県は、江戸の後背地であると同時に、東北や上信越方面との中継地として舟運手段でした。

鉄道や自動車運送が発達する以前、河川を利用した舟運は、一大消費地「江戸」と地方を結ぶうえで、欠かすことのできない物資輸送の手段でした。

埼玉県は、江戸の後背地であると同時に、東北や上信越方面との中継地として舟運手段でした。



利根川東遷と荒川西遷(※提供:さいたま市 見沼たんぽのホームページ)

## ■ 舟運でにぎわった 水郷こしがや

史に大きな役割を果たしていました。越谷市内を流れる元荒川、古利根川、綾瀬川にも荷を積んだ高瀬舟や大小の運搬船が行き交い、活気を呈していたといわれています。

## 越谷市内の「一級河川」

越谷市内には大落(おおおとし)古利根川、中川、新方川、元荒川、綾瀬川の五本の「一級河川」が流れていると紹介されることが多いですが、河川管理者である埼玉県の定義では、越谷市と草加市の境界を流れる「一級河川」の古綾瀬川も含まれていますので、正確には六本の「一級河川」が流れています。

これらの六本の「一級河川」は、「一級水系」である「利根川水系」に属しており、中には、かつての荒川の本流であった河川もありますが、「荒川水系」ではありません。

### ■かつての「利根川」本流のひとつで国境河川 「大落古利根川」「中川」



図2 新方川変遷 B



図1 新方川変遷 A

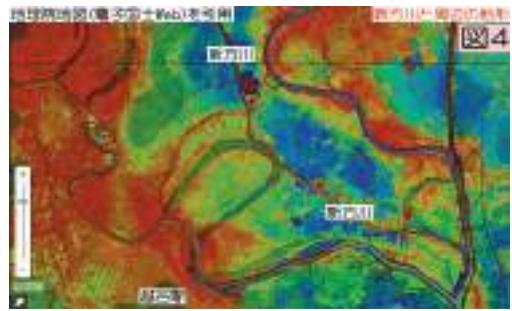


図4 新方川と周辺の地形



図3 新方川変遷 C

水(逆川)」との接続点に、「伏越埋樋」が二ヶ所、設置されていました。

「千間堀」の流末は、後に「埋堀」といわれる流路を経て、「大落古利根川」に落としていたと推定しました。

元禄十四年(一七〇一)五月十四日、旧大吉村内の二ヶ所の「伏越埋樋」を拡張し、「千間堀」の流末を変更、延長して、旧花田村内の「花田古川」に落としました。

文政十三年(一八三〇)成立の『新編武藏風土記稿』の刊行以前には、「千間堀」の流末を変更、延長して、旧中島村内の「大落古利根川」に落としていました。

※これは、「従来の説」とは異なる「新解釈」です。

現在、「大落古利根川」や「中川」として管理される河川の河道(かどう)及び旧河道を

もって越谷市と境界を画する左岸側の旧下総国葛飾郡の一部の地域は、寛永四年(一六二七)から寛永十四年(一六三七)の間に、旧下総国より旧武藏国へ編入され、左岸側は旧武藏国埼玉郡となりました。

かつての「利根川」本流のひとつであったことから「古利根川」と呼ばれていたようで、埼玉県に相当する地域においては、「中川」という河川は存在しませんでした。

大正十二年(一九二三)八月の「吉川新水路」及び大正十三年(一九二四)三月の「松伏領新水路」の開削の竣工

により、「松伏領新水路」と「大落古利根川」との合流地点より下流は、昭和五年(一九三〇)七月一日の旧河道

法の適用河川としての告示により「中川」となりました。

越谷市内における「大落古利根川」の最上流部には、かつて「会の川」と呼ばれた「利根川」本流または支流とされる河川が流れています。

「会の川」の旧河道は、春日部市との境界付近で「大落古利根川」より分流し、「会の川」を再利用している現在の「会の川」→一級河川「会之堀川」→普通河川「沼田落し」→「上船川」を経て、再び「大落古利根川」に合流していました。(図7~9参照)

「上千間堀」が開削されたのは、遅くとも「新方領」の成立する近世前期と推定し、「下千間堀」が開削された歴史は、近世後期の史料を用いて、以下のように推定しました。(図1~4参照)

元禄十二年(一六九九)以前、旧大吉村内の「葛西用堀」と呼んでいました。

「上千間堀」が開削されたのは、遅くとも「新方領」の成立する近世前期と推定し、「下千間堀」が開削された歴史は、近世後期の史料を用いて、以下のように推定しました。(図1~4参照)

■後背湿地の開発のために人工的に開削された河川「新方川」

名称の変遷は、「千間堀」→「新方領堀」(大正五年(一九一六))→「新方川」(昭和四十年(一九六五))

近世後期の絵図によれば、「葛西用水(逆川)」を伏越(当時)した旧大吉村と旧増林村の境界より上流部を「上千間堀」、下流部を「下千間堀」と呼んでいました。

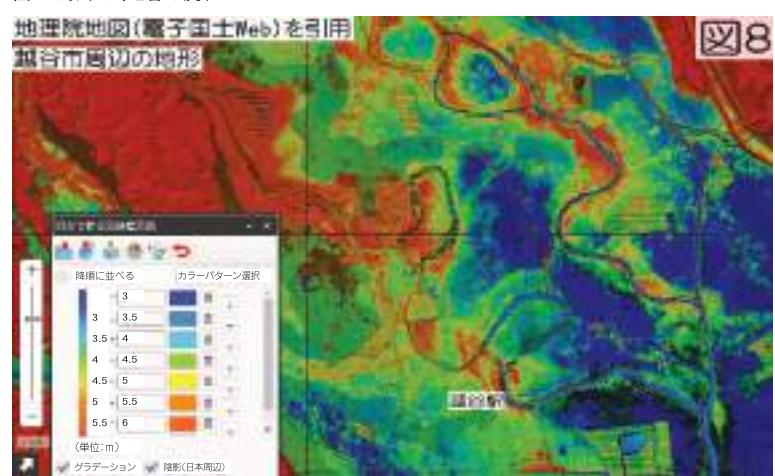
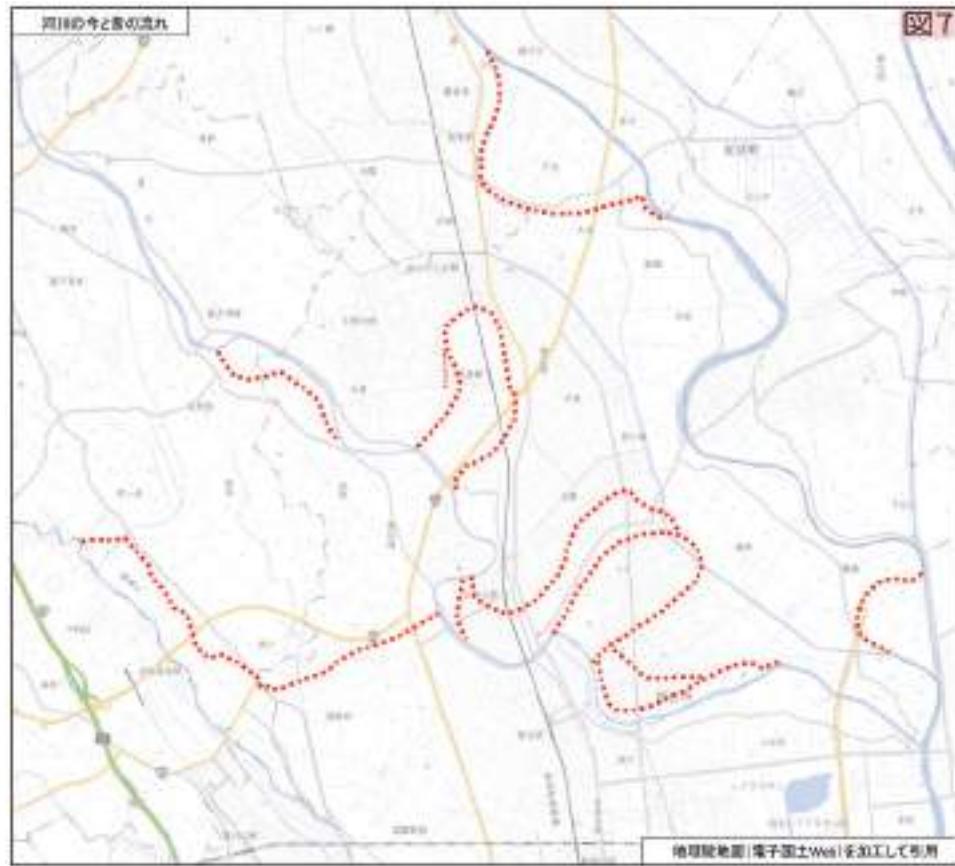
「上千間堀」が開削されたのは、遅くとも「新方領」の成立する近世前期と推定し、「下千間堀」が開削された歴史は、近世後期の史料を用いて、以下のように推定しました。(図1~4参照)

元禄十二年(一六九九)以前、旧大吉村内の「葛西用堀」と呼んでいました。

大正五年(一九一六)、旧大吉村と旧増林村境界の「葛西用水(逆川)」との「伏越」地点から上流部である「千間堀(上千間堀)」において、「新方領耕地整理事業」による改修が「新方川」の河道となりました。

昭和八年(一九三三)十一月、「十三河川改修事業」による改修が竣工し、「大落古利根川」の河道の直道化に伴い廃川となつた旧河道を再利用し、「千間堀(新方領堀)」の流末を延長して、旧中島村内(当時の旧増林村)の「中川」に落とされました。

この時の改修をもって、現在の「新方川」の河道となりました。



・「地理院地図(電子国土Web)」加工:関根 健太郎  
・監修:秦野 秀明

以上、図7のようになります。本市の川の流れは時代ごとにその流路が変わってきており、図8の標高図からもその痕跡が推測できます。

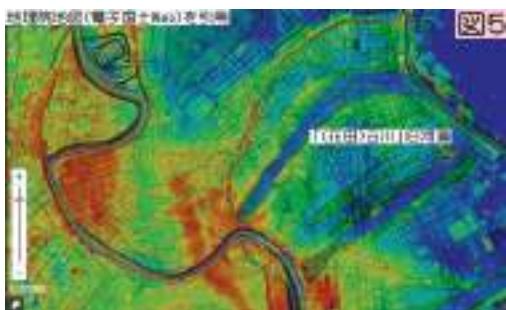
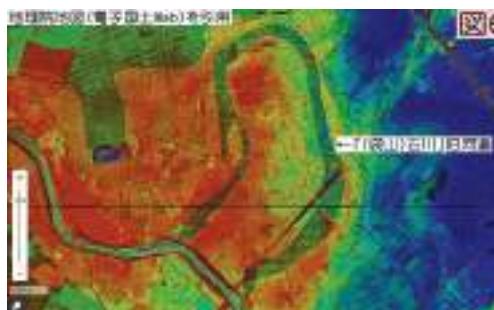


図6 「(袋山)古川」旧河道

図5 「(花田)古川」旧河道

「中川低地」において、南限となる「河畔砂丘」を五ヶ所も有する「元荒川」は、かつての「利根川」本流で、古代の大宝律令(七〇一)で制定された令制国である旧下総国(葛飾郡)と旧武藏国(埼玉郡)の「国境河川」でした。

中世になると、左岸側である旧下総国は荘園となり葛飾郡「下河辺荘新方」、右岸側である旧武藏国は埼西郡(一部は荘園となり「大河戸御厨」となりました)となりました。

近世に入る以前には、左岸側である旧下総国に相当する地域は、右岸側である旧武藏国に編入され、両岸共に旧武藏国埼玉郡となりました。

古代の大宝律令(七〇一)で制定された令制国である旧武藏国埼玉郡と旧同国足立郡の「郡境河川」でした。

中川低地の中でも高低差の少ない地域を流れるために河道の乱流が激しく、「あやしの川」と呼ばれていたようです。

越谷市内においても複数の旧河道が推定され、代表的な

現在は上流部が準用河川「古綾瀬川」、中・下流部が一級河川「古綾瀬川」として管理され、一部の区間は暗渠となっています。

## ■かつての「荒川」本流で

### 【古綾瀬川】

近世以前の「荒川」本流と推定され、旧武藏国足立郡と旧同国埼玉郡の郡界を画していました。

河川として「五才川」と「新川」があり、「新川」は近世中期及び後期の絵図に「古綾瀬川」と記載されており、かつての「綾瀬川」本流のひとつとして推定しています。

近世に入ると、「正保国絵図」(正保元年(一六四四)に作成開始)の完成以前に現「宮前橋」付近、宝永三年(一七〇六)または、宝永四年(一七〇七)に現「猪切橋」付近の二地点において治水と利水の観点から河道の直道化の改修が行われました。(図5~9参照)

## ■かつての「利根川」本流で

### 【綾瀬川】

近世以前の「荒川」本流と推定され、旧武藏国足立郡と旧同国埼玉郡の郡界を画していました。

河川として「五才川」と「新川」があり、「新川」は近世中期及び後期の絵図に「古綾瀬川」と記載されており、かつての「綾瀬川」本流のひとつとして推定しています。

### ■ 河川の造った地形 — 河畔砂丘と自然堤防 —

越谷市内に台地はなく、すべてが「中川低地」に位置し、平らで「マナイヤタ」のような地形になっています。

越谷市に近い台地として、西に「大宮台地」、東に「下総台地」があり、この東西の台地は約十二万五千年前には「古東京湾」という内湾(ないわん)の海底として繋がっていました。

約十万年前には寒冷化が進み内湾は陸化し、約二万年前の最終氷期(最後の氷河期)には現在の「中川低地」に相当する地域では、大河川によって深い谷が削られました。その深さは越谷市大杉で地下約四十七メートルもあります。

約一万年前には温暖化に伴い海水準(海水位、海面高度)が上昇し、現在の「中川低地」に相当する地域にあつた深い谷は、「奥東京湾」という内湾になりました。

約四千年前には現在の「中川低地」に相当する地域に大河川である利根川と荒川の河道が移動して、上流からの堆積物によって内湾は徐々に埋められ、現在のような平らで「マナイヤタ」のような地形になりました。

このように平らで「マナイヤタ」のような「中川低地」に位置している越谷市内ですが、市内各地の「緑道」をめぐり歩いて観察をすれば、その「マナイヤタ」にも微妙な凹凸があることに気付きます。

下末吉海進期の古東京湾

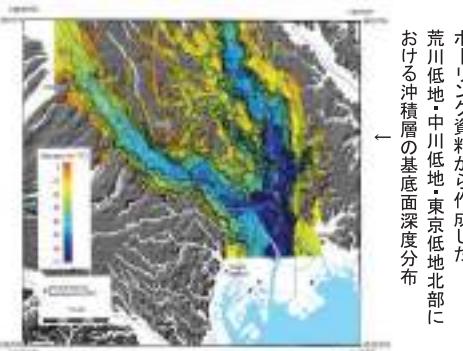


菊地 隆男(1980)「関東堆積盆地」『アーバンクボタ』No.18  
株式会社クボタ p.20より引用

凹地形の代表的なものとして、「自然堤防」と「河畔(かはん)砂丘」があげられます。

「自然堤防」は大きな河川が氾濫を繰り返した結果として造られた地形で、「河畔砂丘」はその「自然堤防」の上に造られた凸地形です。河川が氾濫を繰り返すと「河畔砂丘」の背後に、凹地形で、「河畔砂丘」に造られた凸地形です。

河畔砂丘の代表的なものとして、「自然堤防」の悪い「後背(こうはい)湿地」が広がっています。現在は「後背湿地」の開発が進み、農業地域としての田んぼや、埋め立てられて住宅地域や工業地域に変わっています。



小松原 純子(2014) 特殊地質図No.40「関東平野中央部の地下地質情報とその応用」p.55より引用

凸地形である「自然堤防」の上に造られた「河畔砂丘」は、越谷市の属する埼玉県を代表する特筆すべき地形のひとつです。

「河畔砂丘」は北西からの季節風によって運ばれた砂の層の高まりによって認定され、成因の特徴として蛇行する河道の袂(たもど)に相当する地点の風下側(東側または南側)に造られやすいことが明らかにされています。

「河畔砂丘」は、「中川低地」内のかつての利根川とみられる河道や旧河道沿いのみ分布し、その南限である越谷市内には、元荒川の蛇行する河道や旧河道沿いに「五ヶ所」もあることから、元荒川はかつての利根川の本流であったと言えます。

「河畔砂丘」の造られた年代は不明ですが、春日都市にある「浜川戸河畔砂丘」の時代の終わり頃の土器が出土し、砂の層の上で、「弘安六年(一二八三)六月」と記された板碑(板石塔婆)という供養塔が出土していることから、造られた年代を推測する指標のひとつとなります。

以下は、越谷市内における元荒川の蛇行する河道や旧河道沿いにある「五ヶ所」の「河畔砂丘」の紹介です。

**①袋山河畔砂丘**は、旧袋山河畔砂丘を造った元荒川の蛇行する旧河道の下流部が、旧大林村の西部を、「西を凸に取り囲むように流れています。越谷市内では最も標高が高く、最高地点は標高九・七メートルです。

**②大林河畔砂丘**は、①袋山河畔砂丘を造った元荒川の蛇行する旧河道の下流部が、旧大林村の西部を、「西を凸に取り囲むように流れています。越谷市内では最も標高が高く、最高地点は標高六・五メートルです。

**③北越谷河畔砂丘**は、旧大房村の南西部と旧大沢町の南西部を、「西を凸に取り囲むように流れている元荒川の蛇行する河道の上部に沿って発達しています。最高地点は標高五・九メートルです。(図9参照)

**④東越谷河畔砂丘**は、旧花田村と越ヶ谷宿の北東部を、北東を凸に取り囲むように流れている元荒川の蛇行する旧河道の下流部が、旧小林村を、「西を凸に」半分取り囲むように流れています。越谷市内では最も標高が高く、最高地点は標高九・七メートルです。

**⑤大相模河畔砂丘**は、旧西方村の北東部と旧方村の北部及び旧見田方村の北部を、「西を凸に」取り囲むように流れている元荒川の蛇行する河道の南側に沿って発達しています。最高地点は標高五・九メートルです。(図9参照)

以上は、越谷市内における元荒川の蛇行する河道や旧河道沿いにある「五ヶ所」の「河畔砂丘」の紹介です。

①袋山河畔砂丘は、旧袋山河畔砂丘を造った元荒川の蛇行する旧河道の下流部が、旧大林村の西部を、「西を凸に取り囲むように流れています。越谷市内では最も標高が高く、最高地点は標高九・七メートルです。

②大林河畔砂丘は、①袋山河畔砂丘を造った元荒川の蛇行する旧河道の下流部が、旧大林村の西部を、「西を凸に取り囲むように流れています。越谷市内では最も標高が高く、最高地点は標高六・五メートルです。

③北越谷河畔砂丘は、旧大房村の南西部と旧大沢町の南西部を、「西を凸に取り囲むように流れている元荒川の蛇行する河道の上部に沿って発達しています。最高地点は標高五・九メートルです。(図9参照)

④東越谷河畔砂丘は、旧花田村と越ヶ谷宿の北東部を、北東を凸に取り囲むように流れている元荒川の蛇行する旧河道の下流部が、旧小林村を、「西を凸に」半分取り囲むように流れています。越谷市内では最も標高が高く、最高地点は標高九・七メートルです。

⑤大相模河畔砂丘は、旧西方村の北東部と旧方村の北部及び旧見田方村の北部を、「西を凸に」取り囲むように流れている元荒川の蛇行する河道の南側に沿って発達しています。最高地点は標高五・九メートルです。(図9参照)

越谷市内には、「河畔砂丘」を造った河道や旧河道も数多くあります。

⑥ 北越谷河畔砂丘を造った元荒川の蛇行する旧河道は、旧大房村の南西部から、「押堀（おっぽり）」と推測される旧「大沢七ツ池」に沿って、旧大沢町の西部から北東部へと、後に葛西用水（逆川）の一部として再利用された流路を、現在の葛西用水（逆川）とは逆の方向に流れ、旧花田村の北部から、東越谷河畔砂丘付近へと流れています。

⑦ 東越谷河畔砂丘を造った元荒川の蛇行する旧河道の一部は二筋に分流して、旧小林村の南東部を経て、旧増林村の南部との境界付近

本流とみられる旧河道に合流して、旧谷中村の中央部へと分流していました。その下流部は筆者の推定ながら、  
⑮ 旧大作（おおさく）堀と旧とうかん堀として再利用された流路を、旧越ヶ谷宿の南西部から旧瓦曾根村の南部と旧西方村の南西部を経て、旧登戸村の南東部へと流れ、その下流部からは、現在も多くが残る「不動道」に沿うように南南東から南西北へと蛇行して流れ、旧蒲生村の南西部で綾瀬川へと合流して、現草加市側へと分流して、南西方へと流れ、現川口市の旧江戸袋村で、利根川への分布から、おおよそ推定の河道が造った「自然堤防」以上のように、旧河道はその河道が造った「自然堤防」

を造った河川で、利根川の支流とみられる会野川の旧河道は、旧平方村を、西側を凸に半分取り囲むように蛇行して流れています。上流部から中流部は、現春日部市との境界を画しながら、堀川、沼田落し、上船川の名で、現在も流れています。

⑧ 大落古利根川の本流または支流とみられる会野川の旧河道は、旧平方村を、西側を凸に半分取り囲むように蛇行して流れています。上流部から中流部は、現春日部市との境界を画しながら、堀川（おっぽり）と推測される旧「大沢七ツ池」に沿って、旧大沢町の西部から北東部へと、後に葛西用水（逆川）の一部として再利用された流路を、現在の葛西用水（逆川）とは逆の方向に流れ、旧花田村の北部から、東越谷河畔砂丘付近へと流れています。

⑨ 大落古利根川の本流であった旧河道は、旧増森村の北部及び南東部と旧中島村北部で、西を凸に現吉川市の境界を画しながら、蛇行して流れています。この旧河道の下流部は、開削された新方川の流末として再利用され、現在も、大落古利根川の合流先となる中川に合流しています。

⑩ 綾瀬川の本流であったとみられる五才（ごさい）川は、現さいたま市との境界を画しながら、旧西新井村の西部を経て、旧長島村の南西部で、綾瀬川へと合流しています。さらに下流部においては、綾瀬川の本流であったとみられる蛇行する旧河道が、旧大間野村の南西部から南部にかけて、現綾瀬川に沿って数ヶ所の区間で流れています。

⑪ 綾瀬川の本流であった旧河道を、再利用したとみられる新川は、末田用水の下流部として、旧越巻村の南部から旧七左衛門村の南西部を経て、旧大間野村の南東部で、綾瀬川へと合流して流れています。

⑫ 綾瀬川の本流であった古綾瀬川の蛇行する河道は、

で、元荒川へと合流しています。上流部から中流部は、現春日部市との境界を画しながら、堀川、沼田落し、上船川の名で、現在も流れています。

⑬ 時期は不明ながら、綾瀬川の本流とみられる蛇行する旧河道が、現さいたま市の旧釣上村付近から、現国道四六三号線の旧道に沿うように、旧西新井村の北西部から北東部へと流れ、旧神明下村の北東部で元荒川へと合流していました。⑬の蛇行する旧河道と関連して、

⑭ 元荒川の支流とみられる蛇行する旧河道が、旧野島村の北部から末田用水に沿うように、旧荻島村の北部から南西へと流れ、旧後谷村の北東部と旧西新井村の北東部付近で、⑯綾瀬川の

旧蒲生村の南東部と旧伊原村の南部及び旧麦塚村の南西部で、現草加市との境界を画しながら、その一部が暗渠になりながら現在も蛇行して流れています。

以上のように、旧河道はその河道が造った「自然堤防」

（編集委員 秦野秀明）

このことから、かつては大部分が凹地形であった沼や低湿地から成る水はけの悪い「後背湿地」が広がっていた越谷市内において、いち早く人々が住み始めた場所こそが、「河畔砂丘」と「自然堤防」の上の微高地である凸地形であったのです。

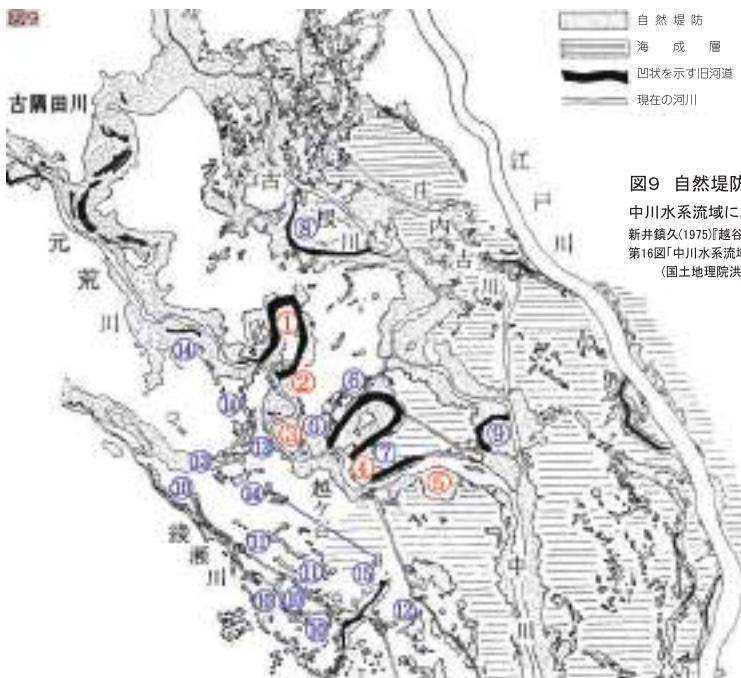


図9 自然堤防

中川水系流域における自然堤防の分布  
新井鏡久(1975)『越谷市史 第一巻 通史』越谷市役所 p.52  
第16図「中川水系流域(中流部)における自然堤防の分布  
(国土地理院洪水地型分類図による)より加筆して引用



越谷市緑道全図(※原図提供:越谷市)

## 越谷リバーウォーク(歩ける緑道)

以下の8ルートに分けてご案内します。

このガイドブックと公式サイトのマップを利用して、あなた独自のマップづくりを愉しんでください。



詳細地図はこの  
QRコードから

- ①元荒川緑道(上流)
- ②元荒川緑道(下流)
- ③新方川緑道
- ④逆川・葛西親水・四ヶ村用水・東越谷緑道
- ⑤八条用水・谷古田河畔・西幹排・東京葛西用水緑道
- ⑥須賀用水・根河原・間久里川緑道
- ⑦綾瀬川・末田用水・新川緑道
- ⑧大相模調節池(レイクタウン)レイクサイドウォーク

※17ページ～34ページに掲載の資料や写真は  
越谷市、越谷市ホームページより引用させていただきました。

## &lt;凡例&gt;

- 整備済緑道
- 休憩施設(ベンチ等)
- 健康遊具・ベンチ等
- スポット広場

①

砂原土手バス停と石仏



②

越谷梅林公園



③

宮内庁埼玉鴨場



「砂原土手」バス停の付近は、元荒川緑道(右岸)と埼玉県道越谷岩槻線が近接して並行しており、朝日自動車が運行する「越谷駅西口-水上公園-岩槻駅線」のバス停「砂原土手」を利用する場合は、越谷駅西口から(まで)約17分です。リバーウォークの途中で利用するのに便利なバス停です。

かつて梅の名所として知られていた「越谷古梅園」や、梅林が多く見られていた地区に、昔の面影を再現すべく、梅林公園を整備したものです。園内には、白加賀、梅郷、紅梅など約40種約300本の梅が植えられています。3月には梅祭り、6月には梅の実収穫体験が行われます。

江戸時代、紀州藩は將軍家から関東に広大な鷹場を与えられていたが、このうち越谷地域は明治時代になって皇室専用の御猟場に指定され、鴨の飛来が少なくなった東京の浜離宮の代替地として、明治41年に完成しました。毎年、皇族や外国大使、国賓などを招待して鴨猟が行われています。総面積は約11万6,400m<sup>2</sup>。

④

押立(おたて)堤と石仏



⑤

北越谷桜まつり



江戸時代後期に越ヶ谷宿本陣を勤めた福井家の7代目となる福井猷貞(ゆうてい)の著した地誌『越ヶ谷瓜の蔓(うりのつる)』に、奥州古道の通過地点として押立堤の記載があり、旧大房村(現・北越谷4・5丁目)の元荒川(左岸)の堤防を押立堤として推定しています。

⑥

土手のシバザクラ



平成21年度に埼玉県の水辺再生100プラン事業により、延長約1.1kmの緑道が整備されました。土手のシバザクラは神明町一丁目付近の住民で組織する「あゆみ会」を中心となり、地元自治会やボランティアによって、平成13年度から植栽や管理活動を行っています。

## 元荒川緑道(上流)

元荒川は越谷市の中央部を流れおり、緑道の整備も充実しています。

上流の緑道では、梅林公園の梅、宮内庁埼玉鴨場の鴨、北越谷市1~5丁目と南荻島の桜、新明町1・2丁目と宮本町1・2丁目のシバザクラなどを見ることができます。四季折々の自然を感じることができます。

■元荒川緑道は、三野宮橋付近の荻島地区・野島の右岸より中島橋付近の両岸となる大相模地区・東町2丁目の右岸、増林地区中島3丁目の左岸までの緑道です。右岸と左岸の経路上には緑道ではない区間もあります。

※河川の上流から下流に向かって眺めたとき、右側を「右岸」、左側を「左岸」と呼びます。



7

## 宮前橋



天嶽寺の前の元荒川に架けられた橋の名称の変遷は、天嶽寺橋・寺橋・宮前橋の順で、江戸時代前に、元荒川の河道の直道化に伴い発生した地域の分断の解消のために架橋されたと推定されます。現在の橋は、昭和34年(1959)に竣工した宮前橋を、平成15年(2003)に人や自転車などが往来するための橋に架け替えたものです。

10

## こいのぼりフェスティバル



子どもたちの健やかな成長を願い、毎年4月29日(昭和の日)に不動橋・相模町スポーツ広場周辺で開催しています。近隣の幼稚園・保育所(園)や小学校の子どもたちが描いた色鮮やかな5mの巨大こいのぼりの泳ぐ様子は一見の価値があります。不動橋の架橋前には、上流側に不動の渡しがありました。

8

## 平和橋



江戸時代に現在の平和橋の下流に、瓦曾根橋(溜井橋)の名で橋が架かっていて、戦時に橋ではなく、戦後の昭和24年(1949)に平和橋と名を変えて再建されました。昭和35年～42年(1960～1967)の用排水分離工事に伴い、昭和41年5月に元荒川に架かる新平和橋、昭和42年夏に葛西用水に架かる平和橋が、上流に移転して竣工しました。

11

## 大相模調節池取水施設



大相模調節池は、元荒川流域の浸水被害を軽減するために設置された施設です。この調節池に貯めることができます。なお、本取水施設は、元荒川の水位上昇に伴い、雨水を取り込むための施設となります。

9

## しらこばと橋



県道八潮越谷線の元荒川と葛西用水に架かる橋。白い大きな主塔から斜めに張ったケーブルで橋を支える市内唯一の斜張橋です。その姿は、翼を広げて寄り添い、大空に向かって飛び立つ2羽のシラコバトをモチーフにしています。夜間はライトアップされます。平成6年(1994)開通、橋長145.1m、幅員13.0m、高さ51m。

12

## 中島橋



元荒川緑道の下流側(左岸)の起点と、新方川緑道の下流側の起点付近となる元荒川に架かる中島橋の北東詰の下流側には、昭和5年(1930)5月造立の「荒川橋開通記念石碑」があります。現在の中島橋の2代前の橋が通行料を徴収した荒川橋で、架橋以前は南百(なんど)の渡しがありました。

## 元荒川緑道(下流)

元荒川と葛西用水瓦曾根溜井の間にある中土手の緑道は“水郷こしがや”的顔。越谷市役所と越谷市中央市民会館の前に広がるパノラマは美しく、市民の憩いの場となっています。

不動橋から中島橋までの緑道は自然が多く残っており、晴れた日には富士山を眺めながら散策できます。また、近くにはラベンダー公園があり、初夏の見頃には花摘みも楽しめます。

## &lt;元荒川&gt;

- 上流地点:右岸/熊谷市大字久下(くげ)  
左岸/熊谷市大字佐谷田(さやだ)
- 下流地点:市内東町2丁目吉川橋付近で中川に合流
- 全長:約61km(市内は約12km)
- 市内に架かる橋:15(上流は三野宮橋、下流は中島橋)



**①**  
新方川と平新川の合流点



川幅や周辺の建物など、大正時代と今とはとても変わりました。今は奥に大杉橋が架けられ、水門の左奥に見えるのは、老人福祉センターくすのき荘です。



**④**  
キャンベルタウン野鳥の森



平成7年(1995)9月オーストラリアキャンベルタウン市との姉妹都市提携10周年を記念し、設置されました。約3,000m<sup>2</sup>のバードケージ内には、キャンベルタウン市より寄贈された鳥類などが放鳥されており、オーストラリアの「自然」を体験することができます。

**②**  
大吉調節池



大吉調節池は、新方川流域の浸水被害を軽減するために整備された施設で、40万tの洪水調節容量があります。平常時は、人と自然がふれあえる空間となるよう、水辺の生態系を復元した親水公園となっています。また、堤防上に整備された1周1.2kmのジョギングコースは、健康増進の場として多くの市民に利用されています。

**⑤**  
越谷総合体育館



越谷市立総合体育館は、関東地方において第1級の規模を誇ります。メインアリーナとなる第1体育室は、収容人員は固定客席2,224席、ロールバックスタンド(半固定席)2,220席、その他合わせて4,500名近くを収容することができ、スポーツ競技や国際試合、各種イベントに対応できます。

**③**  
定使野橋(じょうつかいのばし)



新方川に架かる県道越谷野田線定使野橋の上流側には、葛西用水(逆川)が新方川の下を潜る「伏せ越し」があり、昭和60年(1985)に潜る上下を逆転させて竣工しました。定使野橋の南西詰の上流側には定使野公園があり、新方川(右岸)の堤防上には、逆川緑道(左岸)の起点と新方川緑道(右岸)が交わる地点があります。

**⑥**  
越谷いちごタウン



平成27年(2015)にオープンした関東最大級のいちご狩り観光農園です。栽培面積約1haにある8棟のビニールハウスでは、約64,000株のイチゴが高設栽培で育てられており、さまざまな品種のイチゴを食べ比べて楽しむことができます。

## 新方川緑道

新方川の河川改修にともない造られた大吉調節池は親水公園になっており、周辺には定使野公園やキャンベルタウン野鳥の森が広がり、市民の憩いの場となっています。さらに南下すると、越谷総合体育館やいちごタウンもあり、子ども連れでゆっくり歩いて楽しめます。

■新方川緑道は、戸井橋付近の両岸となる桜井地区・千間台東2丁目の右岸、大泊の左岸より中川への合流地点付近の増林地区・中島の右岸、増森の左岸までの緑道。右岸と左岸の経路上には緑道ではない区間もあります。

<新方川>

●上流地点:左岸/春日都市大字増田新田、右岸/岩槻市大字大戸●下流地点:市内中島と吉川市須賀地点で中川に合流●全長:約11km(市内は約10km)●市内に架かる橋:20(上流は中堀橋、下流は昭和橋)



①

鷺高第五公園  
(キャンベルタウン公園)



ここ鷺高第五公園は、オーストラリアキャンベルタウン市と越谷市の姉妹提携を記念して整備された公園です。このため、公園内にはオーストラリアのエアーズロックをイメージした遊具が整備されています。また、夏にはじゃぶじゃぶ池があり、水と親しみながら遊べる広場となっています。

②

伏せ越し



葛西用水は元荒川と合流してきれいな水を農業用水に送っていましたが、カスリーン台風(1947)以後の抜本的な「水害対策」として、埼玉県では昭和35年から約7年間を要して、元荒川の下を伏越樋管(ふせごしひかん)でくぐらせる、いわゆる川の立体交差工事を行いました。

④

瓦曾根溜井



慶長年間(1596~1615)に造成されたと推定されている瓦曾根溜井は、昭和35年~42年に行われた葛西用水と元荒川とに分ける用排水分離工事により、新たに葛西用水として造成された流路の西側が埋め立てられて、現在の越谷市役所や県の地方庁舎が建設されました。

⑤

旧赤水門スポット広場



江戸時代初期に草堰、前期に石堰であった瓦曾根堰は、大正13年(1924)に鉄筋コンクリート造りの門10門を備える堰として竣工。その色彩により赤水門(赤門)と呼ばれ親しまれましたが、その後取り壊されて平成9年(1997)に現在の姿となりました。花壇や舗道に四季折々の花が咲く潤いスポットです。

③

四ヶ村用水緑道



瓦曾根溜井から取水されている四ヶ村用水が暗渠になり、その上に整備された緑道。距離は300mと短いですが、東屋なども造られ、趣のある緑道になっており、地域のボランティア団体によってきれいに管理されています。ちなみに、“四ヶ村”とは灌漑している流路上の旧埼玉郡八条領瓦曾根村・西方村・登戸村・蒲生村になります。

⑥

東越谷緑道



東越谷緑道は、平成18年から22年にかけて整備されました(全長800m)。緑道の下流側の起点の西には東越谷ボタントン公園、その南には、地域の汚水と雑排水を「中川流域下水道中央幹線」に送水する施設である東越谷第一ポンプ場があります。

## 逆川・葛西親水・四ヶ村用水・東越谷緑道

住宅地の中にある逆川緑道は、子どもや高齢者も安心して歩くことができ、連続した木陰が続く夏も涼しげな緑道で、多くの市民が利用しています。途中にあるキャンベルタウン公園は家族連れで楽しむことができます。

葛西親水緑道は、国内で現存する最古のレンガ水門である谷古田取水口や旧赤門跡スポット公園があり、葛西用水の昔をしのぶことができます。

■逆川緑道は、取水堰である古利根堰付近の新方地区・大吉の右岸、増林地区・増林の左岸より元荒川の伏越付近の大沢地区・大沢4丁目の右岸、越ヶ谷地区・越ヶ谷の左岸までの緑道。

■葛西親水緑道は、柳橋付近の越ヶ谷地区・柳町より取水堰である瓦曾根堰付近の大相模地区・相模1丁目までの葛西用水の右岸にある緑道。

■四ヶ村用水緑道は、蒲生地区・瓦曾根1丁目にある四ヶ村用水を暗渠とした上部にある緑道。

■東越谷緑道は、増林地区・東越谷2・3・4丁目と同6・7丁目の境界に位置する花田用水を暗渠とした上部にある緑道。



①

## 八条用水緑道



八条用水は、江戸時代前期の慶長年間(1596~1615)にかけて、埼玉郡八条領の灌漑用水として開削されました。この八条用水沿いに整備された、全長約3.5km余りの緑道です。

②

## 東京葛西用水緑道



埼玉県水辺再生100プランにより平成20年度~平成21年度(2008~2009)に東京葛西用水の右岸に整備された総延長3.7kmの緑道です。緑化団体「伊原緑の会」が発足し、日々の除草・清掃・植栽などの管理を実施しています。

③

## 谷古田河畔緑道



江戸時代には五ヶ村(ごかそん)用水と呼ばれ、綾瀬川と古綾瀬川に囲まれた旧・谷古田領五ヶ村(現・草加市)に流れていますが、現在は綾瀬川に合流しています。地元の古老は「さんが」と呼んでいますが、これは流路の旧埼玉郡八条領西方村・登戸村・蒲生村の「三ヶ村(さんかそん)」の転訛と推定しています。

④

## 西幹排緑道



本来の出羽堀の流路跡のはどんどうが住宅地になっていて、西幹排の暗渠として再利用された区間の内、東武鉄道の高架線の西より県道足立越谷線付近までの暗渠の上部が、西幹排緑道として整備されました。くねくね道の緑道と並行する岩槻道(槍先通り)は、江戸時代とほぼ変わらない道筋で、途中に久伊豆神社が2社鎮座しています。

⑤

## 蒲生一里塚



蒲生の一里塚は綾瀬川と蒲生愛宕川が合流する蒲生愛宕町にあります。文化年間(1804~1818)に編纂された「日光道中分間延絵図」には、一里塚が東西に描かれていますが、現在は東側のみが残されており、県内の日光道中沿いに残る唯一の一里塚となっています。

※県指定文化財(記念物・史跡)  
指定日:昭和60年3月5日

## 藤助河岸(とうすけかし)



藤助河岸の成立年代は不明ですが、綾瀬川と出羽堀(現蒲生愛宕川)が合流し、日光道中とも接する交通の利便性の高い場所にありました。大正2年(1913)に武陽水陸運輸会社を設立し興隆を極めましたが、昭和初期には廃業したと推定されています。現在、当時の面影を伝えるものとして、荷物の積み下ろし小屋の一部が復元されています。

## 八条用水・谷古田河畔・西幹排・東京葛西用水緑道

八条用水、谷古田用水、東京葛西用水、前ページの四ヶ村用水も含めて、瓦曾根溜井から取水している農業用水ですが、近年は親水機能として活用するために緑道の整備がされています。花壇等も設けられており、地域住民がお世話をしています。

■八条用水緑道は、取水堰である瓦曾根堰付近の大相模地区・相模町1丁目より草加市との境界付近の川柳地区・川柳町5丁目までの緑道。

■谷古田河畔緑道は、取水堰である谷古田領元払付近の大相模地区・相模町1丁目より草加市との境界で古綾瀬川との分流地定の蒲生愛宕町と蒲生南町の境界までの緑道。

■西幹排緑道は、蒲生地区の蒲生西町と蒲生との境界より県道足立越谷線付近の蒲生1丁目までの旧出羽堀を西幹排の暗渠とした上部にある緑道。

■東京葛西用水緑道は、並流する谷古田河畔用水と離れる蒲生地区・蒲生4丁目より草加市との境界の川柳地区・川柳町3丁目までの緑道。



①

## 須賀用水緑道



西大袋土地区画整理地内に位置し、平成18年度～20年度（2006～2008）の3ヶ年に整備され、総延長は620m。水路に沿って4m～4.5mの歩道が設置されています。須賀用水緑道の下流側の起点の北東には、間久里川緑道の上流側の起点もあります。昭和3年以前の「須賀用水」の下流は、現在とは異なり、この地点より北東方向へ流れています。

②

間久里川緑道  
(まくりがわりょくどう)

間久里川緑道は、旧須賀用水の流路を変更した間久里川を暗渠にしてその上を緑道として整備したもので、南には、埼玉県内で23ヶ所確認されている「河畔砂丘」の内の「袋山河畔砂丘」があります。

③

根河原緑道  
(ねがわらりょくどう)

根河原緑道は、かつての利根川本流であった「(袋山)古川」の旧河道の内、東武鉄道の西侧から元荒川へ合流する地点にある外野合ポンプ場付近までを暗渠にしてその上部に整備された緑道です。緑道の経路上にはかつての梅林がそのまま残る民有地の側を通過している区間があります。

## 間久里川（都市防災河川）について

間久里川は、田畠に水を送る水路として古くから親しまれ、守られてきました。現在は、地中に水路として埋設され、地表には遊歩道とせせらぎが流れる水辺空間へと形を変えています。また、地中に埋められた水路は、農地へ水を送る用水路としての機能と災害などの緊急時に水をぐみ上げ使用できる機能を持たせており、遊歩道とせせらぎは、地域住民も季節の花の手入れや清掃などに協力し、うるおいとやすらぎの場所として親しまれています。



越谷市・新方領用悪水路土地改良区 間久里川説明看板より

## 須賀用水・根河原・間久里川緑道

この地域は、古くは千間台、近年は西大袋の土地区画整理事業により、水田を埋めて造られた住宅地が広がっています。農業用水として重要な須賀用水も、近年はまちに潤いをもたらす親水機能が注目され、側道や暗渠の上部が緑道として整備されており、近隣の住民にとっては気軽な散歩コースとなっています。

■須賀緑道は、須賀用水の大袋地区・三野宮より間久里川との分流地点である大道までの緑道。

■間久里川緑道は、須賀用水からの分流地点である大袋地区・大竹より東武伊勢崎線付近の桜井地区・上間久里までの間久里川を暗渠とした上部にある緑道。

■根河原緑道は、東武伊勢崎線付近の桜井地区・下間久里より元荒川へ合流する大袋地区・大林と荻島地区・南荻島の境界までの緑道。根河原緑道は、元荒川の旧河道である袋山古川を元荒川第3-1号雨水幹線の暗渠とした上部にある緑道。



①

## 末田用水緑道



荻島小学校の北の末田用水と根井堀用水が分流する地点より県民健康福祉村の北の三ツ又堰までが整備されています。国道463号線より北部の区間の大部分は、戦時にあった陸軍越谷飛行場の南東側の敷地に沿って緑道があります。

②

## 県民健康福祉村



緑の中の健康増進施設として設置された県民健康福祉村。中心施設となる「ときめき元気館」には屋内温水プールとトレーニングジム、屋外にはテニスコート8面、ソフトボール場、多目的グラウンドがあります。公園エリアは、一周約1.8kmのジョギングコースとウォーキングコース、その外周は約2kmのサイクリングコースとなっています。

③

## 出羽公園



昭和63年(1988)開園で広さは9.2ha(平成19年4月現在)。多目的広場(野球場)、冒險広場、相撲場、体育館、憩いの広場、ゲートボール場、テニスコート、児童広場、池などがあります。3月末から4月にかけて桜が満開になり、毎年4月には地域の方や小・中学生が大切に育てたチューリップの鉢植えを一堂に集めてチューリップフェスタが開催されます。

④

## 新川緑道



新川は排水路として大部分の区間を県道岩槻蒲生線に沿いながら綾瀬川に合流します。現在、上部は緑道、下部は管渠の都市下水路としての工事が進行しており、いずれは全区間が緑道として整備されることが期待されます。

⑤

## 出羽堀ポンプ場



最上流部のある荻島小学校の東の根井堀用水より最下流部のある出羽堀第1号雨水幹線の綾瀬川への合流地点までを含む約600haの出羽堀排水区の主な排水の役割を担うのが、出羽堀第1号雨水幹線と出羽堀第2号雨水幹線で、綾瀬川の合流地点で内水氾濫等を防ぐ役割を担うのが出羽堀ポンプ場です。

⑥

## 綾瀬川緑道



綾瀬川は乱流を繰り返した河川ですので、かつての村境を成していた河道も変遷し、越谷市・草加市・川口市の市境が入り組んでいます。左岸に草加市の区間、右岸に越谷市の区間もあり、越谷市に相当する区間の右岸には緑道が整備されています。この緑道を歩くと綾瀬川の旧河道の名残が感じられます。

## 綾瀬川・末田用水・新川緑道

越谷市の南西の端に位置する綾瀬川緑道は、草加市及び川口市に接しています。ここは、流れや対岸を眺めながら長い距離をウォーキングしたい方に向いています。また、近くに出羽公園や県民健康福祉村がありますので家族連れでも楽しめます。余裕のある方は末田用水緑道まで足を延ばすと、しらこばと水上公園まで行くことができます。この辺りの出羽地区では、江戸時代から越谷の特産品であるクワイ畑が見られます。

■綾瀬川緑道は、出羽地区・新川町1丁目より蒲生大橋付近の蒲生地区・蒲生愛宕町の左岸までの緑道。出羽地区・大間野町5丁目は右岸にも緑道があります。左岸の経路上には緑道ではない区間もあります。

■末田用水緑道は、荻島小学校付近の荻島地区・南荻島付近より三ツ俣堰のある荻島地区・西新井と北後谷との境界までの緑道。経路上には緑道ではない区間もあります。

■新川緑道は、出羽地区・新川町1丁目より国道4号線付近の同地区・大間野町4丁目までの新川を暗渠とした上部にある緑道。



## &lt;綾瀬川&gt;

- 上流地点: 左岸・右岸 / 桶川市大字小針領家
- 下流地点: 中川(葛飾区)に合流
- 全長: 約47km(市内は約6km)
- 市内に架かる橋: 6 (上流は佐藤橋、下流は蒲生大橋)

①

エントランスゲート



来訪者を迎える街の顔として景観に配慮して整備されたシンボルゲート。北池の広大な水面が見渡せ、水上ステージ、桟橋、モニュメントなどが点在する越谷レイクタウンを代表する特徴的な空間を形成しています。

②

水辺のまちづくり館



地域住民や来街者による地域交流やまちづくりの情報発信拠点として活用することを目的に、UR都市機構が整備し越谷市に移管されたもので、現在は観光協会の活動拠点として、池の管理・運営やイベント等の実施を行っています。(2009年3月竣工)

③

旧東方中村家住宅



旧東方村中村家住宅はもと武藏国埼玉郡八条領東方村にあったもので、東方村下組の名主を勤めた中村家の居宅です。安永元年(1772)に建築されたと記されていて、建築年代の確認できるものでは越谷市最古の住宅といわれています。

④

ビオトープ



北池北西部のビオトープ空間は、植栽した樹木が大きく生長し、その後自然に生育した植生と相まって一帯を被い、湖畔林となっています。ここに湿地に依存する生物が生息して街全体をエコアップする装置となっています。

⑤

キャナルゾーン



センター街区に隣接し、河道幅員の狭いキャナル状の空間特性を活かし、街並みとあわせた景観を楽しむゾーンとして整備されています。このキャナルをはさんで東側が集合住宅、西側が戸建住宅地となっています。

⑥

せいたかしぎ橋



この大相模調節池には大小合わせて7箇所の橋梁があり、主な橋梁にはレイクタウンにふさわしく水鳥の名前が付けられています。セイタカシギの名を付したこの橋は、地区の南側のゲートともなり、照明柱が特徴的です。

## 【番外編】大相模調節池(レイクタウン) レイクサイドウォーク

一級河川元荒川大相模調節池は河川管理者である埼玉県から包括占用の許可を受け、越谷市が(仮称)大相模調節池親水公園として日常の維持管理や池の利用について管理しています。

この調節池は、「新しく水との共存文化を創造する都市」をスローガンとした越谷市の地区整備事業「越谷レイクタウン事業」の一貫で、水害対策としてつくられたものです。大きな北池と細長い南池とがキャナル(運河)水面でつながっており、周囲に全長5.7kmの遊歩道“レイクサイドウォーク”が整備されています。



※説明文引用:UR都市機構関係資料

※原図提供:越谷市

## ■ 河川の役割

# 越谷市のかわまちづくり 将来の展望を探る

河川の機能は洪水対策の治水、農業用水や都市用水として利用する利水が中心でしたが、一九六〇年代の後半から、景観、エコロジー、レクリエーション、気候調節、心理的存在などを包含する新しい概念として親水機能が追加されました。

越谷市を流れる都市河川では、防災機能の確保や身近な環境空間の保全と創出、都市活動を支える空間としての役割が大きくなっています。さらに、地球の水循環システムでも河川は大きな役割を果たしています。

先進事例研究等を通して、本市のかわまちづくりの可能性を探ります。

## 川とまちづくりの取り組み 先進事例

### 雑誌による情報発信から美しい川を取り戻す活動 そして市民の誇りを醸成する観光遊覧船事業まで

川を活用したまちづくりの先進事例として、かねてより注目していた株式会社グッドラック 代表取締役会長 中村孝一氏へのヒアリング調査を実施しました。

中村氏は、富山県富山市で「月刊グッドラック」による情報発信とともに、市内中心部を流れる松川を活かした“水の都とやま”再生への挑戦をし続けてこられました。当初は現地を視察する予定でしたが、コロナ第七波による感染拡大により、オンラインで実施させていた

だきました。——ヒアリング調査記録（実施日／令和四年六月四日）

#### ■ 中村孝一氏のプロフィール



一九四四年富山市生まれ。一九七七年「月刊グッドラックとやま」創刊、发行人。一九八七年「富山観光遊覧船(株)」設立、代表取締役に就任。一九九七年米国サンアントニオ・リバーウォーク視察、「松川を美しくする会」発足、会長に就任。二〇〇三年神通川直線化一〇〇周年記念川と街づくり国際フォーラム開催、事務局長に就任。二〇〇四年富山市合流式下水道改善計画アドバイザー会議委員、二〇〇七年「松川・いたち川整備懇話会」委員。二〇一七年「水の都とやま」推進協議会設立、理事長に就任。



## ■子どもの頃から 持ち続けた思い

子どもの時に兄から勧められた米国の月刊誌『リーダーズダイジエスト』を熱心に読んだり、ボイスカウトに入り、その理念や文化に触れ、心豊かな少年期を過ごした経験から、人生は精神的な豊かさが必要だと気づき、将来は心の糧になる雑誌を出したいと思っていた。

建築・デザインの仕事に携わった後、三十三歳で夢をかなえるためグッドラックマガジン社を設立して創刊号を発行してから四十五年、本年八月で経過通刊五三七号となつている。

当初は敬愛する故ジョン・F・ケネディ米国大統領の影響で、米国『サンシャイン・マガジン』を翻訳した記事を中心に、心豊かな人生を応援する記

事を書いていたが、富山から全国向けの出版は難しく、地域が求めていた話題を取り上げるタウン誌に移行してほとんどなかつた時代である。

同氏は昨年、これまでの実績を評価され、国土交通省などが主催する第二十三回「日本水大賞」で審査部会特別賞を受賞された。

行き、まちづくりの記事を書くようになった。まちづくりに特化した雑誌は全国でもほとんどなかつた時代である。

同氏は昨年、これまでの実績を評価され、国土交通省などが主催する第二十三回「日本水大賞」で審査部会特別賞を受賞された。

いまだ、郷土を愛する子どもたちの夢を持続させており、どぶ川のようになった松川をきれいな川にして富山の美しい原風景を取り戻したいと活動している。

同氏は昨年、これまでの実績を評価され、国土交通省などが主催する第二十三回「日本水大賞」で審査部会特別賞を受賞された。



桜並木の下、松川を進む遊覧船と松川茶屋のカフェテラス

## ■松川浄化活動

市街地を流れる松川には、ひときわ思い入れがあった。一九七五年、富山市中心部の松川をコンクリートで蓋をして駐車場化するという無謀な計画が発表され、大論争が巻き起こる。都市問題では、水辺環境保全が大きなテーマになっていた。

『川はそこに住む人の心を映し出す』と気づき、水と関

わる住民生活の意識を「内面から豊かにする」発想が必要との思いから、住民に水辺環境の実態を絶えず観察してもらうため、遊覧船の運航に取り組む。水辺が美しくなると、水辺を見つめる意識を持つ人が増えて市民の誇りも高まり、それにふさわしく周辺も整備される。そこに観光客が集まるようになり、観光都市としても成長することとなつた。

## ■松川雨水貯留施設の整備

松川に流されるゴミや川底の「ドロ」は、市民や船頭、行政の努力によって、みるみる改善されていったが、最大の課題は合流式下水道の改善である。雨が降るたびに下水が入り、近づくと臭いので、遊覧船の乗客からも不評を買った。管理する市の上下水道局に

相談すると、五人委員会を立ち上げるので委員として参加し、提言して欲しいと要請される。そこで地下に貯留槽を設け雨水と污水を分け、污水は浄化場へ流れいくようにして、松川には一滴も入らないよう

提案。初めは、「巨大な予算を必要とする事業は地方都市では不可能!」と笑っていた担当者も、松川遊覧船の乗客が国内だけでなく、世界中からやつてくるようになると態度が一変し、委員会設置から七年経つ二〇一二年、ついに地下貯留

槽の建設に着手、六年かけて二〇一八年に完成した。

百年に一度の歴史的大事業ともいえる「松川雨水貯留施設」の完成は、「環境未来都市」に選定された富山市の本気度を示すものとなつた。

それでもあきらめず関係部署に集まつてもらい粘り強く説明をしたところ、「たしかにこれまで洪水対策だけの川になつていて、おっしゃる通り、これからは水辺環境を美しく整備して、遊覧船が行き交う『水の都とやま』のシンボルとなるよう、県、市を挙げて協力しましょ」という前向きな発言を引き出すこ



地元紙の写真コンテストでも入選

## ■遊覧船事業

江戸から明治にかけ、松川が神通川だった時代、富山港から富山城への舟運が発達し、たくさんの帆船が行き交い賑わっていた。その歴史と文化を生かし、遊覧船が行き交えば、本来の美しい水辺環境を蘇らせることができるのではないかと考へ、この計画を県に相談すると「遊覧船など前例がない!」と猛反対される。

それでもあきらめず関係部署に集まつてもらい粘り強く説明をしたところ、「たしかにこれまで洪水対策だけの川になつていて、おっしゃる通り、これからは水辺環境を美しく整備して、遊覧船が行き交う『水の都とやま』のシンボルとなるよう、県、市を挙げて協力しましょ」という前向きな発言を引き出すこ

とに成功。一九八七年ついに行政を動かすことができた。

この出来事は、一九九七年の河川法改正により、これまでの「治水」「利水」にプラスして、「環境」という新しい柱が加わる十年前のことだった。

この年、国、県、市、経済界の支援のもと、「富山観光遊覧船(株)」を設立。出版事業にプラスして観光事業による水環境の改善が図れるか、その挑戦が始まった。

コロナ前には遊覧船事業の経営もやっとトントンになつてきたが、今回のコロナ禍で落ち込んでしまい、再度立て直しをする必要がある。

■サンアントニオとの関わり  
一九八九年、当時の富山県知事からの紹介で『アメリカのベニス』を目指して成功したサンアントニオ市を視察した。街の中心部には松川と同じ

ような川が流れ、その川辺りにはレストラン、ホテル、コンベンション施設が集まり賑わっていた。

『川の王国』富山県のリバーフロントを考える上で学ぶことが多かつた。

この縁で神通川直線化百年を記念して開催された『川と街づくり国際フォーラム』にサンアントニオからリチャード・ハード氏を招いて基調講演をお願いした。この議事録には市民が参加し、目標を掲げたまちづくりが重要であり、このマスタープランが市と市民に評価される計画であれば、お金はついてきます。』と書かれている。まさしく本市には、このビジョンが必要と改めて感じた。

その後も、サンアントニオに定期的に人を派遣して現地との交流を継続するとともに、調査研究を通して人材の育成も図っている。

街の中心部には松川と同じ

## ■今後の展望

水環境の健全化に必要なのは、未来への展望であり、希望を決して失わない信念である。そしてソフト面、ハード面を分けて考えると、活動に参加する人も自分の役割がわかりやすい。

ソフト面ではリバーブルエスタや、遊覧船を使つたランチやディナーパーティなど、さまざまな楽しいイベントで、松川の楽しさ、賑わいを高めた。ハード面では『水の都とやま』推進協議会で話し合った内容を行政に提言し、できる所から実現してきた。

しかし『官民協働』とひとくちに言つても、責任範囲や立場もあって簡単に進まない。三十五年前に提案したことが、まだ実現できていないものもある。当初、行政は河川法を盾に難色を示したが、粘り

強く一つずつ実現してきた。後日、当時の行政担当から、あなたが提案し実現したことは奇跡だと言われた。

富山は昭和二十年八月の大空襲で、市内中心部の九九・五%を焼失。文化財や歴史的建造物を失つたので、この復元を松川河畔でできないか検討中である。旧富山市立図書館などは、東京駅を設計した辰野金吾の設計であり、旧富山市役所も復元できれば、松川河畔に建つ現庁舎との比較もでき、市民に自分たちの街が歴史も文化もある街として、誇りを持つてもらえるのでは、と計画中である。

『

神通川の歴史と水辺を活かした美しいまち』を創るために、官民協働でのプロジェクトに挑戦し続けている。まだまだ夢は続く。

## ■取材を終えて

中村氏の活動は、地域タウン誌を通じて市民や地元政財界を巻き込み、粘り強く行政を説得して実現させたもので、雑誌を通して地域を元気にしています。その活動の根底には「人と人の絆をつくり、本当の幸福とは何かを考えてもらえる記事を読者に届けよう!」という初心と意気込みが脈々と流れています。同氏は初心貫徹して実践してきた手腕の実業家のイメージがありましたが、実際にお会いしてお話を聞きると、気さくで郷土愛に満ちた穏やかな人間性を感じました。

(編集委員 若色欣爾)

※取材ページに掲載の写真は、グッドラックとやまより提供いただいたものです。



サンアントニオのリバーワーク

## 先進事例から見る 越谷市の可能性

# 川と共にあるまちづくり……将来の展望

## 水と緑の越谷



広島市京橋川のオープンカフェ（※写真提供：広島市）

### ■水辺のオープンカフェ

リバーオークの休憩場所として川沿いにオープンカフェの設置を提案します。候補地として市役所の葛西用水沿いのデッキ等が適地と考えられます。

先進事例として、広島市のかわまちづくりがあります。

全国で最初に川辺にオープンカフェを設置し、二〇〇八年のかわまち大賞を受賞しました。協議会がプラットフォームとなって、民間事業者から出店者を選定し、そこで得た収益を事業に回していくというスキーム 자체が新たなモデルとして、全国の他地域にも波及しています。



水路のある住宅地（こしがや四季の路）

### ■暗渠の活用

越谷市は水田地帯であったため、かつては用水や排水が網の目に走っていましたが、市街化が進むにつれて、多くの水路に蓋がかぶせられ暗渠となっています。この暗渠を探して歩きながら、これを活用する方法を考えてみます。

#### ①遊歩道として

暗渠の多くはコンクリート板を架けたままの状況が多く、安全に歩くための整備はなされていません。バリアフリー化やソーラーライトによる

夜間の足元照明を設置すれば、安全に歩行することができます。災害時の避難通路の役割を果たすこともできます。

#### ②緑道として

暗渠を改修する場合に、開渠にする場合と、水路は地下に埋めてその上に新たに水辺空間をつくる方法があります。

暗渠の幅や長さ、周辺の環境によって適切な改善方法を探索する必要があり、その管理も地域住民が関わるシステムをつくることが求められます。



根井堀用水暗渠に整備されたスポット公園

なり素晴らしい住環境となりました。

また、根河原緑道は行政が整備した事例で、雨水幹線の上部を利用した緑道です。夏場には、浄化された雨水が緑道上のせせらぎ水路に流れ、街なかに潤いをもたらしています。

このように、暗渠になつてゐる水路でも、自然護岸の復元により、水と緑が市街地でも感じられるまちづくりが実現します。



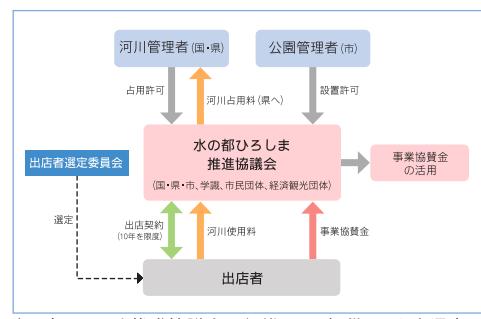
雨水幹線上部を利用した緑道（根河原緑道）

### 【参考事例】

開渠として整備する場合の参考事例として、水路のある住宅地（こしがや四季の路）

この暗渠を再生し水辺の緑道を整備すれば、身近なところでも水と緑が感じられ、温熱環境改善が図られ、心身ともに安らぎのある、より良好な住環境が実現するでしょう。

この暗渠を再生し水辺の緑道を整備すれば、身近なところでも水と緑が感じられ、温熱環境改善が図られ、心身ともに安らぎのある、より良好な住環境が実現するでしょう。



葛西用水沿いのデッキ



古利根堰(※写真提供:越谷市)

本市でも大落古利根堰や元荒川の末田須賀堰を活用した小水力発電の可能性があります。各々の水利権者との調整が必要になりますが、自然エネルギーを地産地消する意義は大きいといえます。

国土交通省では、小水力発電の導入促進を図るため、小水力発電に関する水利使用許可申請書類の一部省略、都道府県知事等への許可権限の移譲及び小水力発電プロジェクト形成支援窓口の設置など、水利使用手続の簡素化・円滑化等を進めてきました。さらに平成二十五年十二月より従属発電について許可制に代えて新たに登録制を導入したところです。

京都大学の広井良典教授が主宰されている「鎮守の森コモンティ研究所」で自然エネルギーの自給自足の研究をされており、本市での小水力発電の可能性を打診したところ、専門家の意見として、次のようなコメントをいたしました。



※国土交通省水管理・国土保全局の小水力発電の手引きより模式図提供

地形であり、河川も大き過ぎず、小さ過ぎず、「一級指定」以外の水路が多いように見えます。十九キロワット未満であれば電気設備として扱いやすいので、二十ヶ所前後は適地がありそうです。実際には現地調査や、水利権の調整が必要になると思

ど、水利使用手続の簡素化・円滑化等を進めてきました。さらに平成二十五年十二月より従属発電について許可制に代えて新たに登録制を導入したところです。

京都大学の広井良典教授が主宰されている「鎮守の森コモンティ研究所」で自然エネルギーの自給自足の研究をされており、本市での小水力発電の可能性を打診したところ、専門家の意見として、次のようなコメントをいたしました。

「小水力発電に、良さそうなことが解ります。」

地形であり、河川も大き過ぎず、小さ過ぎず、「一級指定」以外の水路が多いように見えます。十九キロワット未満であれば電気設備として扱いやすいので、二十ヶ所前後は適地がありそうです。実際には現地調査や、水利権の調整が必要になると思

うことが解ります。

### ■ 地域資源と住民意識

昨今、SDGsに注目が集まり、継続可能なまちづくりを考える上で、地形、立地、風土などの地理学的な視点から地域を見直すことが重要な要素になってきています。

越谷リバーオークプロジェクトの目的は、本市の地理的



(仮称)大沢一丁目河畔公園の風景



小梅橋船着き場(※写真提供:墨田区・すみだフィルムコミッショ

### ■ 舟運の復活

かつて越ヶ谷は舟運で栄え、日光道中越ヶ谷宿の大沢橋付近に船着き場がありました。

現在、元荒川の大沢橋左岸に(仮称)大沢一丁目河畔公園が整備中ですが、ここに浮き桟橋を設置すれば、いろいろな活用が考えられます。

元荒川の桜並木は毎年多くの人が訪れていましたので、これからお花見用の屋形船を出

すことも考えられます。

もう一つのアイデアとして東京湾までの水路を開発する越谷・お台場ルート整備事業です。普段は観光船として運行しますが、災害時の避難ルート確保の一環として、東京都に協働事業を提案するのも一つの選択肢でしょう。元荒川は水位が浅く大型船は難しいと言われていますが、ホーバークラフトや水陸両用車の採用などで挑戦する価値はあると思われます。

### ■ エネルギーの地産地消

近年、エネルギー自給率の向上や地球温暖化対策への関心の高まりから、再生可能エネルギーの導入促進が図られており、特に、小水力発電はクリーンかつ再生可能なエネルギーであり、大規模な投資が不要であるため、今後さらなる普及が期待されています。

特徴である河川にスポットを当て、その魅力や可能性を見直して未来志向のまちづくりを考えることにあります。

本市は関東有数の穀倉地帯であり、舟運により商業が発達し、日光街道の整備と一緒に宿場町として発展してきた歴史があります。近代になると、戦後復興期より東京のベッドタウンとして急拡張しました。「新住民」が多く流入しました。新旧住民の融合が課題でした。新旧住民の融合が課題でした。地域の伝統行事やお祭り等を通して地域コミュニケーションを生じ、新たな都市コモンを醸成していくことが求められます。

例えば、水田の減少で本来の役割が衰えてきた農業用水は、都市河川としてそのあり方を考える時代になっています。農業用水は農民だけのものではなく、地域資源として地域住民で保全や活用を考えるまちづくりが必要になるという事です。

まちづくりには市民共通の目標やテーマが必要ですが、本市にとって「川」はまさにそれになりうる可能性があると考えています。

行政が川に関する課題に対応する際に、その機能や役割ごとに担当が分かれており断片的な施策や事業を実施しているのが現状であるといわれます。川をテーマにまちづくりを行う際にはこれらを包括的に取り上げ総合的に施策にする必要があります。

本プロジェクトは景観まちづくりをはじめ、健康交流・教育・環境・観光・経済等の行政課題を解決する可能性を秘めており、幅広い波及

効果が見込まれることを考えると、従来のタテ割り行政の見直しが求められています。国交省では「かわまちづくり」支援事業を実施しており、

従来の川の役割である治水利水中心の施策から、親水の視点からのまちづくりを支援するものと考えます。

川は古くから培われた地域の歴史や文化、人々の生活とのつながりが深く、水辺にはその地域特有の資源が眠っております。川の持つ新たな価値を生み出し、地域の「顔」、そして「誇り」となる水辺空間の形成を目指しています。

かわまちサミットの開催  
かわまちづくりの取り組みはその地域の地形、風土、文化によって、地域ごとに

異なってきます。それぞれの取り組みを共有化することにより、その地域ならではの川をテーマした特徴あるまちづくりが推進されると考えています。

国交省ではかわまちづくり支援の一環として、平成二十七年度から三年間、かわまちづくり全国会議を開催してきましたが、残念ながらその後は途切れています。

そこで、かわまちづくりを実施している都市が集まり実施事例を発表し情報交換を行う「かわまちサミット」を提案し、本市が積極に関わることを期待するものです。

また、これを全国的にプロモーションすることで、観光客や関係人口が増加して、地域経済の活性化にも寄与するものと考えます。今回の越谷リバーウォークプロジェクトがその初めの一歩になれば幸いです。

## 越谷リバーウォーク プロジェクト 実行委員会 代表 若色 欣爾

継続可能なまちづくりへ  
まちづくりは結果が出るまでに月日を要するため、継続することが重要です。

## 編 集

### 【越谷リバーウォーク ガイドブック】編集委員会

#### 編集委員

- 委員長 若色 欣爾 (NPO法人 越谷市住まい・まちづくりセンター 代表理事)
- 委 員 関根 健太郎 (越谷市住まい・まちづくり協議会)  
瀧田 雅之 (NPO法人 越谷市郷土研究会 理事)  
秦野 秀明 (NPO法人 越谷市郷土研究会 副会長)

## 発 行

### NPO法人 越谷市住まい・まちづくりセンター

#### 越谷リバーウォークプロジェクト 実行委員会

〒343-0806 埼玉県越谷市宮本町2-185-12 電話048-965-5358  
<https://www.koshi-machi.com>

- 編集・制作 まち・ものづくりラボ
- 印刷・製本 有限会社オメガ印刷